

「私はどのように召命を受け献身したか」

田口昭典

1979年12月、西日本新聞社会部の中村記者は「大学生、この半熟世代」という連載記事を書いており、説教をしている私の姿を写真に収め、その記事に添えた。記事の最後に彼の率直な評価が一言書かれていた。私がIBMの技術者を辞めて牧師になる道を選んだことを「一種のドロップアウトである」と書いた。彼は私を「落ちこぼれ」と見た。見事に言い当てている。私の献身は困難からの逃避に映ったのだ。

1966年の12月24日、ギデオン協会から頂いた一冊の新約聖書がきっかけで私は生まれて初めて釧路鶴ヶ岱メノナイト教会の門を潜った。雪が降りしきるクリスマス・イブであった。牧師は棚瀬多喜雄先生。学生時代の4年半、家のすぐそばの教会に時々出入りしていた。

1971年5月、就職のため、私は北海道を後にし、神奈川県大和市に移り住んだ。そして、日本バプテスト連盟の最後の直属開拓伝道所であった相模伝道所で求道生活を始めた。松田正三先生が牧師であった。北海道の釧路高専を卒業して6畳一間のサラリーマン生活を始めたが、能力不足、慣れない仕事、人間関係、ホームシック等々、得体のしれない不安で私は会社に行けなくなるような苦しい日々を送り、死にたいとさえ思うようになっていた。私は毎日祈った。「何も要りません。高給も自由な休暇も要りません。結婚もできなくていいです。死ぬ時、ただ、いい人生だったと言って死にたい」と。教会は私の唯一の憩いの場であった。

自分の力では自分を支えることが出来ないことを悟り、全てを主に委ねて1971年12月5日、寒い冬の朝、バプテスマを受けた。薔薇色に世界が変わることはなかった。しかし、私は、「自分はイエス様のものになった」と確信した。「すべての道で主を認めよ、そうすれば主はあなたの道をまっすぐにされる」（箴言3：6）の御言葉が私を励まし、慰めてくれた。休まず、礼拝と祈祷会に出席した。やがて私は自信を取り戻し、仕事が面白くなり、あの「祈り」を忘れた。

1974年の12月、クリスマスにマタイ2：1－12が読まれた。この時、幼児イエス様を礼拝した東の国の占星術の学者たちは、ヘロデの元に帰るなどのみ告げを受け、「他の道を通して自分の国へ帰って行った」。「他の道」という御言葉に衝撃を受けた。私の祈りに応えて神が備えた「他の道」を歩まず、ヘロデのところにいる自分に気づかされた。神は私にどんな「他の道」を備えておられるのか？思い巡らす日々が続いた。1975年のゴールデンウィーク、私はクリスチャン新聞が募集した韓国教会訪問のツアーに参加し、他の道を探した。ツアーは「韓国教会の成長に学ぶ」というものであった。前年、ソウルの汝矣島広場でビリー・グラハムによる大伝道集会が開かれおり、1万人のバプテスマ式が行われたと聞いていた。行く先々で「献身」について学んだ。民族総福音化の情熱に燃える青年たちと交流し、チャレンジを受けた。「将来主の導きがあれば献身したい」と最後の証会で話した。クリスチャン新聞日曜版に「献身を決意―田口昭典」と載って、大いに戸惑った。また、神奈川連合の青年会で参加した湯河原の城山学園でのワークキャ

ンプ、奉仕を終えて帰る時、園長の金子益雄先生が「田口さん、献身してもいいよ」と言われた。心が落ち着かず、翌日先生を学園に訪ね「主の召命と献身」の意味を教わり、お祈りしていただいた。5年働いた会社を退職し、1976年3月、神学部入学試験の前日、福岡空港に降りた。準備のないまま受けた試験は散々だった。その晩、私は受験票の裏に、その時の心境を記した。「神様、準備不足で試験は不合格になると思います。しかし、私が牧師になることをあなたが望み、私を召してくださり、献身へと導いてくださっていることを確信しています。私は西南がダメだったら、次の神学校を受験します。あきらめません。」と。

神は私を牧師になるよう様々な状況や機会、人との出会いを通して召してくださった。今振り返ると、私の献身も召命も相当問題の多いものであった。しかし、主は、私の祈りへの答えとして、私を召してくださった。最高の人生だったと言って主のみ許に帰るために。